百々裏話（7）

―花伝私注その一―

表　章

百々裏話もとう〳〵息切れがしてきたのでこの辺で方向転換させてもらうことにした。此頃、雑誌「宝生」に「世阿弥私注」と題する香西精氏の論稿が掲載され出したが、これはなかなか面白い。これに刺戟されて、こちらは少々範囲をせまくして風姿花伝（花伝書）の私注を試みようと思い立つてみた。ただし時々は旧稿に似たものも書かせてもらいたい。

風　流

されば、古きを学び、新しきを賞する中にも、全く風流をよこしまにすることなかれ。ただ言葉いやしからずして、姿幽玄ならんを、うけたる達人とは申べき哉。

これは風姿花伝の序文の一節である。ここに見える風流は妙な用法である。別紙口伝に、「フリウエンネンナンドニ」とあるのが他の世阿弥の用例の唯一のものであるが、これは延年と並べられているから、中世に流行したはやし物としての風流に相違ない。それとここ とは明らかに別であろう。能勢先生は、申楽の代名詞のように風流の語を用いたものと解されたらしく、ここを「決してこの風流を邪道に走らしめてはならない」（評釈上）と口訳されている。小西先生が「この芸を」（河出書房「日本古典全集」世阿弥十六部集）と訳されたのも同じ見解からと思われる。この説は、可能ではあるとしても、風流が申楽に置換えられることの理由の十分な説明が困難で、どうも落着かない。そのためか、川瀬博士は「風流な芸能」（注校花伝書）、田中允氏は「風流の精神」（国文学第二巻第二号）と、それぞれ言葉を補つて解釈されているが、今日一般に使う風流の語義と用意に解される惧れがあり、これまた具合がいいとは言えない。

ところで、風流なることばは、もともとは漢籍から出たもので、その第一義は「前代の遺風、先人の余流」と言う意味である。この元来の意味が、先の引用文の風流にぴたりと適合するのではなかろうか。風流を「先祖代々継承してきた遺風伝統」と解することによつて、申楽の由来を説いた引用文の前の文とも関連するし、「風流をよこしまにすることなかれ」が古風・新風を学んでゆく際の根本態度を指示した言葉として生きてくるであろう。ただ、世阿弥の頃に風流の第一義的用法が一般に行われていたかどうかが問題であり、筆者もまだその例証を持合せない。しかし、

○時移り、代へだたりぬれば、其風をまなぶ力及びがたし。（序）

○殊更この芸、その風をつぐといへども、自力より出づる振舞あれば、語にも及びがたし。その風を得て心より心に伝る花なれば、風姿花伝と名付く。（第三奥書）

○その風をうけて、道の為、家の為是を作する所、私にあらんものか。（第五奥書）

などに於ける「風」を主体とし、それに

○是ハコナタノリウニワシラヌ事にて候。（佐度より禅竹あて書状）

○世子一りうはがくはなし。（申楽談儀）

などの「流」を添えて、世阿弥が独自の感覚から使いはじめた言葉と見ることも可能であろう。問題としている序文に直接対応するのが第三問答条々の奥書であるが、そこに「風をつぐ」「風を得て」などと、伝統・遺風の意に使われている「風」と、序の「風流」とは、決して無関係ではないと思うのである。

うけたる

前掲の引用文に於ける「うけたる達人」も難解である。「うけたる」に関する従来の説には(1)受けたる（名望を得た）とする説（吉田博士・

能勢博士・田中允氏」、(2)享けたる(天成の、天禀の)とする説「小西博士」、(3)「世間で承認した」と見る説(川瀬博士)、(4)「たけたる」の誤写とする説」野上博士・野々村戒三氏」などがあるが、能勢先生の言葉を借りれば、どの説も「も一つぴつたりとしない」ようである。(1)ならば「得たる」とある方が自然だし、(3)ならば「うけられたる」とあるべく、冒頭の序文から天禀の素質の必要を説くことは考えられぬから(2)にも賛し難い。(4)の誤写説は苦しまぎれの切札であろうが、用例からみてここに闕けたるが現れるのは具合が悪い。

ところで、この「うけたる達人」について、風姿花伝の数多い写本を調査してみたところ「うけたる達人」とあるのは金春本・吉田本・観世清親抜書本の三本であり、宗節本が「うけたる」と「達人」の間に小さく墨で「ヲ」と補っているのをはじめ、生駒本・観世家別本・謡増抄本・観世元章注入本などは、「うけたるを、達人とは」とあるのである。これらの諸本は絶対に宗節本から転写した本ではない(ことに注入本は吉田本と同系である)から、宗節本筆写の底本となつた古写本の本文は「うけたるを」となつていたに相違ない。どちらかと言えば金春本により近い本文を有する宗節筆片仮名巻子本が「ウケタランヲバ達人トハ・」となつていることは、一そう「うけたるを」の本文の可能性を強めるものであろう。もし「を」のある方が正しい本文であるとすれば、ここの部分は、

たゞ、言葉いやしからずして、姿幽玄ならんをうけたるを、達人とは申べす哉。

と句読を置いて読むべきであり、「うけたる」は上に接続し、直接「達人」を修飾しないことになるから、従来の解釈はみた別の立場から考え直さねばならないことになる。そして右の部分は、「うけたる」に「享けたる」をあてて、

上品な言葉と幽玄なる姿を、生れつき身にそなえた天成の人を、達人と称すべきであろうか。

と解するか、或は「承けたる」をあてて、

上品な言葉と幽玄な姿という、歌舞の二要素を正しく継承している人を……

とか解すべきであろう。達人となるのに天授の素質を必要とすることを序文で言明するのはやはりおかしいから、いずれかと言えば後者を採るべきであると思う。

しかしながら、「姿幽玄なるをうけたらんを」ならばともかく、「姿幽玄ならんをうけたるを」という文脈は、どうもぎこちない。むしろおかしい位である。従つて「うけたるを」の本文が正しいときめてしまうことは、なお疑問であると言わねばなるまい。数の上からは「を」のある本が多いが、「を」のない金春本や吉田本の信頼度はそれらの諸本に勝るとも劣らぬものがあるのである。結論を出すまでには、なお詳細に伝本の系統を調べねばならないが、今のところ私はやはり「うけたる達人」の本文を採りたいと思つている。

それならば、「うけたる達人」と読んだ場合にはどう解すべきであろうか。私見は「を」を補つた本文の場合と同じく、「承けたる」をあて、伝統を正しく継承している達人と解したいのである。「承く」の用例としては、前掲の第五奥儀の奥書に、「その風をうけて」とある一例をあげるだけで十分であろう。これならば、前に「風流をよこしまにすることなかれ」と言つているのとぴつたり照応するし、続いて「非道を行ずべからず」と風流を邪にする何よりの原因をいましめていることと前文とを関連せしめることになろう。少くとも、前述の四説よりは私見の方が、序文全体に論旨の一貫性を与える解釈であると信ずるのであるが、いかがであろうか。風流についての私見と両方を採用すれば、一そう序文が生きてくるようにも思う。(8・30)